

最優秀賞

「出会いのかたち」

結婚とは何だろう。以前のわたしは、しばしば考えていました。慈しんでくれた両親の元から独立せねばならず、ずっと親しんできた苗字も変えねばならないかもしれない。何より自由や時間が制約される。結婚などしなくても良いのではないか。それが、漠然とした、わたしの答えでした。しかし、わたしは結婚したのです。

岡谷市で生まれ育った私は、京都の大学に進学しました。そこには個性的な友人たちとの出会いがありました。大阪出身の夫も、その中の一人で、何年もいわゆる「同級生」でした。決して劇的な出会いではなく、夫など出会いさえ覚えていないでしょう。

そんな二人の共通点は、食いしん坊だということでした。共通の話題があるというのは、楽しいことでしたし、食べ物を分け合って食べると、一段と美味しい気がしました。また、自分のためだけに作る夕食はいい加減なものでしたが、人のために心を込めて作ることを知りました。食文化は随分違いましたが、串揚げの食べ方を教えてもらったり、たこ焼きを一緒に焼いたり、異なることの面白さを学びました。舞い散る桜の花びらを、地面に落ちる前につかむと幸せになれるといえ、一生懸命つかんだ花びらをお酒に浮かべてくれました。何よりそこにいてもらえるだけで、随分救われる思いもしました。そんな時間を重ねる中で、いつしか、ずっと一緒にいたいと思うようになりました。

二人でいられるのであれば、結婚などしなくても良いのかもしれませんが。しかし結婚は、二人の「ずっと」を家族のみならず、公にも認めてもらえることだと考えます。結婚することで、周囲に守ってもらえる。そう考えると、結婚は素敵な制度だと思えました。今わたしは、はっきりとすることができます。結婚は素晴らしいと。

周囲に結婚をせっつかれて、辟易されている方もいるかもしれませんが。でも結婚は自分で望んで得る幸せです。また求めれば、適齢期の平均値は得られるかもしれないけれど、思いついたときこそが適齢期です。あなた自身の「適齢期」に、ともにありたいと思う人と出会い、素敵な結婚をされることを願っています。

破田野智美（京都府京都市）

優秀賞

「家族の歩幅」

短大時代の友人関係から交際をスタートさせた私達、学校生活を送る一方、ゆっくりと2人の関係を築いてきました。お互いどちらが先に出るのでもなく歩幅を合わせ、1人がつまずけばもう1人もつまずき、1人が疲れて休みたくなったら、2人して座りこんでいました。

そんな私達に転機が訪れたのは社会人になって数年、結婚を意識し、彼が転職をしたことからです。

それまで同じ歩幅で歩いてきた彼が、少し先に行くようになりました。私や、これから増えるであろう家族を守る為、仕事に対する姿勢、物事1つ1つに対する考え方全てが少しずつ変わってきたのです。

私が辛いことがあり相談すると、以前はうなずくだけの彼が、今では私と一緒に解決方法を模索するようになり、仕事においては常に高い目標を持ち、実行しようとする向上意識が強くなりました。

最近ようやく気付いたことがあります。少し先を歩いていた彼はただ先に行くだけでなく、私が歩きやすいように道を開いてくれていました。昔のようにつまずく事はなく、疲れて休みそうになる私の手を引き、前に進めるように背中を押してくれます。

毎日変化を遂げてゆく彼に、私は毎日、毎日彼の内面から出る優しさ、家族を守ろうとする強さに惹かれ続けています。しかしその反面、自分の中に焦りが生じています。日々成長し素敵になっていく彼にとって、自分はどれほど魅力的な女性でいられているのだろうか。私が家族にしてあげられる事とは…。

今年の夏、私は1児の母になります。

私ができる事、家族の為にしなくてはいけない事、それはこの子を守る“心(しん)”の強い母になり、彼が開いてくれた道をこの子を支えて歩いてゆく事です。また彼にとって魅力的な女性でいられるよう向上意識を持ち続けたいと思います。

夫が与えてくれた未来に、子供が授かったという幸せに、毎日感謝の気持ちでいっぱいです。

“私を見つけてくれて、選んでくれた夫(かれ)に、赤ちゃんに、本当にありがとう“

さくら (伊那市)

優秀賞

「豊かな老後を楽しみにして」

テレビを見ながらアイロンをかける。歌番は画面を追う必要がない。今は冬だからワイシャツの袖と襟だけである。慣れると簡単なことだ。そして翌朝着替える夫が気づく。そこですかさず妻の愛を押し売りする。アイロンをかけるのは、私がよい妻であることを夫の周りの人たちに示すためだ。我が家の味は何？と聞いたら、いつも味が違うのでどれとは言えないとの返事。アバウトでいいのだと勝手に思っている。完璧にやろうと思っていると疲れる。できない時はしない。

一人は気楽だ。自分のしたいことだけしていればよい。買い物も、旅行も自分の財布と相談するだけで、他人の許可はいらない。だが、いつまでも若くはない。若い時は今のままの自分がずっと続くような気がしていた。自分が変わることは考えられなかった。友人たちには友人たちの生活があり、いつまでも一緒になって遊んでほしくない。

結婚は女にとって負の財産が増えるような気がする。洗濯、炊事、配偶者に連なる社会との付き合い。面倒なことばかり考える。だが、子を授かり、育て、社会に送り出す喜びもある。年に2度車のタイヤ交換時は、夫がいて良かったと感じる時である。夫は口には出さないが、食事や、着替え時に妻のいることに感謝しているのだろうと思う。

30の時に老後の二文字が心臓に響いた。目指すは豊かな老後だ。経済的にも精神的にも充足された豊かな老後だ。今という時間は誰にも止めることはできない。人は生まれてからひたすら死に向かって生きてゆくのだ。迎えた老後であたふたしないよう、今から準備しておかなくては。起きたい時に起き、寝たい時に寝て、食べたいものを食べる。平日特典を十分利用して行きたい所へ行き、人生を謳歌するのだ。しかしそれは一人では楽しくないだろう。理解し合える人と、気を使うことなく過ごす時間でなくてはならない。結婚生活は、少しの緊張と、責任感を感じながら、いつまでも今のままの二人でいられるよう努力も必要である。だが、その先に豊かな老後が待っていてくれるのなら、今、多少の犠牲(?)を払っても、自分のために努力すべきだ。楽しんで楽は得られない。

今、月に一度の趣味への参加は夫が送り迎えしてくれる。出かける時は運転手。買い物時は荷物運び。家の中の力仕事は夫。時々飲みに出掛けては愚痴を聞いてもらい、世間の情報を得る。生活の違う二人が一緒に暮らすのだから、意見の合わないのは当たり前。どこで折り合いをつけるか、いかに相手を教育するか、お互いの根競べでもある。それでも少しずつ分かり合えるようになると、二人で過ごす豊かな老後が待っているのだ。

理解し合える人にめぐり逢えることが人生のカギでもある。会えて良かったと思っている。今、一人だったらどんなに経済的に恵まれていたとしても、心が寂しいもの。

幸せになった女 (伊那市)

優秀賞

「私のささやかな夢」

あったかいミルクティーを飲みながら休日家族と過ごすだんらんの時間。これが私のお気に入りの時間です。言葉はたくさんいきりません。夫や子供と同じ空間と時間の中にいれば疲れた心が癒されます。

16年前、私達は結婚しました。お互い人間相手の仕事を持ち、決して口上手ではない私は、職場でそれなりに人間関係のストレスも経験しました。どんなに辛いことや悲しいことがあっても、家に帰れば私を待っている家族がいてくれる。家族だけは私の側でいつも味方でいてくれる。何度か仕事を辞めようと思うときもありましたが、その気持ちを消してくれたのは家族の笑顔と存在そのものです。一つの仕事をこうして20年続けてこれたのは家族のおかげです。子供達も思春期を迎え、最近では私のアドバイスの存在となり、子供から教えてもらうこともたくさんあります。「親も子供に育ててもらっているんだなあ」と最近実感しています。

夫の退職まで、5年余りとなりました。今はお互いに忙しい生活ですが、夫が退職したら一緒に日本の美しい自然を満喫したいと思っています。新婚旅行で訪れた上高地で、雄大な山々を眺めながら、二人で歩んだ道のりを語らいたいものです。それから、海のさざ波の音を聞き、満天の星を仰ぎながら露天風呂につかり、人生という長い旅の疲れをしばし癒したいものです。この旅はまだまだ続きますから。

これが今の私のささやかな夢です。その日を夢見て、忙しいけれど、今日も仕事、主婦、子育てをがんばります。

ゆめ （伊那市）

優秀賞

「笑顔とエクボの効力」

何かを学ぶ時、近道を発見した。それは『すなおさ』という、ごくシンプルなこと。

初対面の相手と話すときに、話題の間口が広い人の方が有利に思えるけれど、口下手を自負する人は『知らないことを聞けるか...』『相手のおしゃべりを楽しむヨユウがあるか...』この二つを持ち合わせている人の方が、はるかに好感度が高いことを私は知っている。そう、知識をひけらかすだけでは会話は弾まないのだ。まず人生&結婚の、少しセンパイとして申し上げておく。

私が友人の紹介で主人と初めて会った時、おしゃべりした内容は全く覚えていないが、大きな笑い声とエクボが印象的で、それは今でも大好きなところ(笑)。そんなエピソードからもお分かり頂けると思うが、主人の荒げた声を私は聞いたことがない。「相手が大人だからでしょう？」と言われたらそのままだけれど、この笑顔とエクボ、私には長〜く効き目を発揮している。オマケに、どんな話題でも付き合ってくれてよくよく聞いてくれる。

感心するのは『ON - OFF』の切り替え。見た目で言うと「スーツかジャージか」と単純だが分かりやすく、また何を着ても格好が良い...。と、結婚 20 周年でこんなことを書けるのは幸せ以外の何者でもないのだが、相手はどう思っているかは...尋ねる勇気がない。そこは反省中の私だから、あえて最後に書いてみよう。

交際期間より、結婚後に過ごす時間の方がはるかに長いことから、フリーの今しか出来ない『選ばれた時に、困らない自分作り』そうセールスポイントを増やす事に時間を費やせば、自分に少し自信がついて、そんな自分が好きになって...いずれ心のヨユウに繋がるのかなと。スタートする時期に早い遅いはありません。私と一緒に自分磨き始めませんか？

Mrs . グリーン (伊那市)

優秀賞

「明るく 賢く そしてお互い様」

この3月12日で、結婚15周年を迎える。早いものだ。

つい先日、小学校2年生の息子に「ママのどんなところが好きで結婚したの？」と尋ねられた。学校の宿題で調べているらしい。

「う～ん 明るく、賢く、お金持ちだったからかな」

と答えると、

「えーっ じいちゃんと同じじゃん」

と息子がいう。同じ質問を同居している祖父にもしていたらしい。私は絶句…。そんなところで似ていなくてもいいのに。血は争えない。たぶん息子もそうなるであろう…。

笑い話や、妻からは突き上げのネタになるのだが、「…お金持ちだったから」というのは嘘ではない。浪費家な私は、堅実な妻の性格に惚れたのである。浪費癖については今でも迷惑をかけている。反省はしているが、なかなか直せなくて、いつも怒られている。

妻が私のような人間と結婚してくれたのは何故なのかまだよくわかっていないが、きっと私のどこかに、妻には持っていない力が備わっているのだと信じたい。でなければ15年も一緒に生活できるわけがない。

この15年間、いろいろあった。楽しいことばかりではない。お互い大病をした。大きな涙流して、私の口から「告知」した。人づては逃げであり、夫婦ではない。きちんと自分から伝えることができて本当によかった。だから可能な限り傍にるようにした（今は少しウザくなっているけど…）。

自分が体調悪いのに、変な自己判断で寝ているだけのところを「バカじゃないの！救急外来行くよ」と妻が引っ張ってくれなければ、今、自分が普通に生活できていたかの保障はない。

心が折れているとき、ひとりには不安だ。だからそんな時、支えることができなくても傍にいて、嫌味のひとつふたつ言って、励ましてあげたり、あげられたりのお互いさまなんだろうと思う。

だから、そういう妻とめぐり合うことができたことは幸せなんだろうと思う。

ありがとう。そして、これからもよろしく。

浪費家の男 （伊那市）